

これからの高齢帰国者支援のあり方

- 「学習実態等に関する調査」から見えてきたこと -

馬場 尚子

はじめに

「高齢帰国者の学習実態等に関する調査」について

- 1 . 調査対象と方法
- 2 . 調査内容
- 3 . 調査結果

高齢帰国者に必要な「支援」とは

おわりに

はじめに

馬場は前号(2000)で、高齢化する孤児世代帰国者(以下、「高齢帰国者」とする)が定着地でどのような「学習機会」を得ていくことが望ましいのかについて考察し、「学習機会」提供の試みの一例について報告した。その中で、高齢帰国者が定着地で、自分にあった学習機会を得にくいこと、地域(住民)との接触機会が少なく、閉じこもりがちになる者も多くいると予測されることは述べた。そしてこの間にも高齢帰国者の「生活」「適応」「自立」等を論議する動きがいろいろな場でなされてきている。孤児世代帰国者達自身が自らの経済的基盤づくりのために老後保障を国会に求める活動を始めた。厚生労働省は2000年9月にまとめられた「中国帰国者生活実態調査」¹を踏まえ、同年12月には「中国帰国者支援に関する検討会報告書」²を出し、「高齢化した帰国者については、地域社会での孤立も指摘されていることから、経済的な自立に限らず、地域での交流を保ちながら社会の一員として生活するという意味での社会的ないし精神的自立を図

¹平成11年に実施され平成12年にまとめられた。調査結果については中国帰国者定着促進センターホームページ「同声・同気」にアップされている。
²厚生労働省は「中国帰国者支援に関する検討会」を2000年5月24日に発足させ、1)日本語習得 2)就労支援対策 3)高齢化した帰国者への対策 4)ボランティア団体等による支援との連携 5)今後の帰国者の推移を踏まえた効果的支援のあり方などを巡って、7回に渡り検討会を開きその結果をまとめたものである。本紀要【厚生労働省資料】参照。

ることを主として支援することを、今後の施策の基本とするべきである」という指針を示した。

このような状況の中で、私たち帰国者に関わる人間として今、何をどのように、そしてなぜこの高齢帰国者問題を解決していかなければならないのかを改めて考える必要があると思う。そのために、まず、高齢帰国者達の「今」をもう一度確認し、問題を整理する必要があると考えた。そこで、私たちが採れる方法として中国帰国者定着促進センター(以下、センター)の退所生を対象に調査を行うこととした。本来、帰国者の実態を知るためにはそれぞれの定着地で、時間をかけて一人一人に話を聞きたいところであったが、時間的にも、労力的にも実施が難しい状態にあり、中国語の識字力に問題なしと思われる退所生には紙面調査という方法を採用することにした。また、紙面調査に答えるのが難しいと思われる退所生には、電話インタビューを行った。電話インタビューについては数量的にも限られた人数しか行えなかったという点と、聞き取った結果は紙面調査の結果に集約される部分が多かったことから、今回は紙面調査の結果を中心として報告を行うこととする。また、その結果を踏まえ、何が今後の高齢帰国者支援に必要なかを「 」で考察する。

「高齢帰国者の学習実態等に関する調査」について

- 1 . 調査対象者と方法

- (1) 調査対象者：センター退所時年齢、55歳以上65歳以下、退所後1年以上5年以下(47期～58期修了生)の孤児本人とその配偶者。中国語の識字力に問題のないと思われる者。125名：98世帯(孤児本人66名、配偶者59名)

- (2) 調査方法：郵送による紙面アンケート(中国語)B4紙2枚 【資料】参照
回答方法は、回答者が答えやすいように選択肢方式を多く取り入れた。
実施期間：2000年8月～9月

2 . 調査内容

調査は、高齢帰国者の現在置かれている、学習実態、生活実態を知ることが目的とし、以下のA～G、7つのテーマにより19の質問項目を作成し、実施した。
A . 同居者の実態 / B . 退所後の日本語学習状況 / C . 日本語学習ニーズ / D . 地域の日本人との交流実態 / E . 交流ニーズ、学習ニーズ、またそれを阻害する要因 / F . ライフステージと生き甲斐 / G . 現在抱える問題や心情等

3. 調査結果

(1) 回答者とその分布

返信者数：転居先不明8名7世帯 / 返信者数72名(56世帯：孤児本人44名、配偶者28名) 全体回収率62%(孤児本人回収率70%、配偶者回収率52%)

有効回答者数71名 (55世帯：孤児本人43名、配偶者28名)

回答者平均年齢：60.42歳(孤児本人59.8歳、配偶者61.4歳)

返信者の分布

[表1] 期別回答者数

「送」とは転居先不明を除いた調査票送付者数 /)は世帯数

期年	47 95	48 96	49	50	51 97	52	53	54 98	55	56	57 99	58
件数	4 3)	1 1)	7 5)	4 3)	3 2)	10 8)	6 4)	9 7)	10 7)	11 9)	5 5)	2 2)
送	7 6)	5 4)	16 10)	9 8)	3 2)	16 12)	8 6)	16 13)	10 7)	12 10)	7 7)	8 6)

[表2] 学習者タイプ³別回答者数

学習者タイプ	de	f	gh	KI	M
件数	20	14	12	23	3
送付者数	38	31	14	30	4

[表3] 地域別回答者数

地域	北海道	山形	新潟	茨城	群馬	埼玉	東京	千葉	神奈川	静岡	他3県
件数	1	2	2	1	3	8	37	6	11	1	0
送	1	3	3	1	4	11	54	10	23	1	6

回答者の特徴を見てみると、孤児本人からの回答率が配偶者より多かった。また、学習者タイプとしては、gh以上タイプの読み書き力の比較的高いと思われるタイプからの

³学習者タイプとは、入所時のクラス分けテスト(学習適性、日本語理解度、中国語識字力等)の結果から、学習者のタイプ分けをしたもの。de < mで総合力が高いと見なす

回答率が若干高い。また、地域としては、センターの退所生が関東(東京、神奈川、埼玉、千葉)を中心とした関東以北への定着者が多いことから、調査結果も比較的関東の都市部に定着した帰国者の状況を反映していると言えるだろう。

(2) 項目別集計結果

A. 同居者の実態

同居・別居家族

同居家族(この項目のみ総数56世帯：無効回答者の内、添付の手紙により実態が把握できたため)

	配偶者のみ同居	配偶者以外の同居有	独居	未記入
世帯数	25	21 内訳：孫のみと2、子のみと2、子世帯と17	7	3

日本にいる別居家族

別居家族有無	有	無	未記入
世帯数	39	3	14

上の結果から、有効回答数53世帯の2,3世帯との別居率(独居、或いは夫婦のみで暮らす世帯)は60%である。また、同居の内「孫のみ」という者が2世帯いた。この2世帯を除き2世帯(未婚2世も含めて)と同居している世帯を見ると36%の同居率である。また、この同居者も呼び寄せ直後の2世帯の可能性も高いと思われる。ちなみに、既婚2世帯(夫婦のみ、或いは子どものいる2世帯)が2世帯以上日本に来ている世帯数は24世帯であった。その中で1世代と同居している既婚2世帯は、9世帯であった。すなわちこの9世帯は、呼び寄せたばかりの2世帯の可能性があり、経済的にまだ独立できていない可能性のある家族で、じきに独立、別居する可能性があると考えられる。

⁴ 国費帰国者は、帰国の際55歳以上であれば、未成年の2世及び既婚2世帯を一家族のみ同伴できる制度がある。

B. 退所後の日本語学習状況

センター退所後の学習機会・期間（複数回答）

場所	件数	学習期間	月（件数）
中国帰国者自立研修センター（「再研修」含む）	59	4-8(19) 9-12(21) 13-24(15) 25-44(3)	
地域の教室	25	2-8(5) 9-12(6) 13-24(7) 25-48(4)	
家庭教師（自立指導員）	4	3(1) 9(2)	
自学自習	10	4-8(4) 9-12(1) 13-24(3)	
その他（職業訓練校）	1	6(1)	

センター退所後の学習機会が自分にあっていたか（複数回答）

項目	件数
どれも自分にあつた学習だった	14
自分に合ったものもあつたし、合わないものもあつた	28
どれも自分にはペースが速すぎた	17
どれも自分には内容が難しすぎた	25
その他	18

「その他」18件中、「高齢」「覚えられない」「忘れる」の記述を含むもの10件

上の結果から、自分にとって適した学習環境であつたという者は14件であつたが、この質問は複数回答であるので「自分に合つていた」のみを選択した者は、10件であつた。これは、この質問の有効回答62件中16%である。その他の者は「速すぎる」「難しすぎる」「覚えられない」等、何らかの不適合感を抱えた経験を持ったことになる。確かに、定着地の学習資源を考えてみると、中国帰国者自立研修センター（以下、自立センター）は、教室数、講師数とも少ないにも関わらず、多様な構成を持つ定着者世帯全員を受け入れなくてはならず、その中で個別のレベル、ニーズに応えていくことは困難であらう。また、地域のボランティア教室なども比較的若い年齢の学習者を対象としている場合が多く、高齢者向けの教室というのは、各地域にほとんどないという状況がこの結果の背景にあると思われる。

⁵ 自立研修センターを修了した者等、帰国後1年以上経過した帰国者のうち、再度日本語を学習することを希望する者に対して自立研修センターで行われる日本語研修のこと。詳細はセンター紀要5号参照。

⁶ 夜間中学や、自立センターの「再研修」において高齢帰国者向けのコースを設けているところも若干ある。

また、25ヶ月以上日本語学習を続けている者は、2年以上前（55期以前）に退所した54名中、13名であつた。その中で「自学自習」を除いて、日本語教室や何らかの日本語学習の場を得て学習を続けている者は10名であつた。これは、第二言語としての日本語を学ぶ成人学習者で、かつ時間的にもゆとりのある高齢帰国者の学習継続率として高いとは言えないだろう。また、仕事に就く可能性や近所づきあいもそれほどない高齢帰国者にとって、日本語教室等は日本社会との接触の場でもあると考え、この継続率の低さは閉じこもりがちな高齢帰国者の実態を表しているとも言えるのではない。

C. 日本語学習ニーズ

現在の学習状況・希望（複数回答）

現在状況・希望	件数
今、教室で学習中である	13
今、自分で学習している ⁷	35
今は、適当な学習の場はないが、自分のペースや、レベルにあつた高齢者向けの教室があれば学習したい	16
今更もう日本語の学習はしたくない（今のままでよい）	5
その他	4

「その他」の記述としては、教室に通学するための交通費が出ないことへの不満や年齢的な障害などが多かった。

日本語学習したくない理由（複数回答）

項目	件数
勉強しても覚えられないから	4
日本人とつきあう機会もないから	1
家族や帰国者仲間とつきあえれば満足だから	0
将来は中国に帰りたいから	1
その他	1

現在教室で学習している13名の学習場所は自立センターの「再研修」（6件）、地域のボランティア教室（6件）、自立指導員（1件）であつた。「自分で学習している」が回

⁷ 「自分で学習している」の学習方法としては「テレビ20件、本・テキスト13件、辞書5件、テープ5件、単語2件、日本人との接触2件、ビデオ1件、仕事1件、ノート1件」。テレビによる日本語学習が目立った。

答者の半数(35件)いるが、この内「適当な学習の場があれば学習したい」にダブルチェックしていた者が15名いた。つまり、「自分で学習している」の20名は教室での学習は希望していないことになる。これは、教室学習への負担感や諦めがあるのではないかと予想される。完全に日本語学習を拒否しているのは5名である。この理由については、「勉強しても覚えられないから」が一番多かった。

学習目的(順位回答⁸)

:1位、 :2位、 :3位(値合計は を3点、 を2点、 を1点とする)

項目				値合計
日本に来たのだから当たり前	23	5	1	80
日本人と交流したいから	3	6	8	29
日本で生活するのに不便だから	9	16	8	67
日本語を学ぶのが楽しいから	0	1	3	5
日本語ができないと子や孫とコミュニケーションがとれないから	0	0	6	6
その他	1	0	0	3

「その他」にチェックを入れた者は1件であったが、チェック無しで記述欄のみに記述した者が複数いた。内容として「夫の仕事を助けるため」「保証人や周囲の人との会話ができないため」「仕事をしたい」「自分は日本人なのだから」「社会に貢献したい」「病院で困る」などがあった。

学習の目的としては、「日本へ来たのだから当たり前」という答えが圧倒的に多かったが、これは孤児本人にとっては「日本人なのだから日本語を話さなければならない」という強い思いの結果ではないかと思われる。事実、この選択肢を選んでいる孤児本人の割合は他の項目より高かった。2位は「生活するのに不便」であり、高齢隣国者は来日してしばらくたってもサバイバルレベルでの日本語でさえ困難である可能性が高いと予想される。ついで多かったのは「日本人と交流したいから」であった。選択された件数としては1位、2位とは多少開きがあるが、無効回答の内この項目に「」を付けていた者が24件あったことを考慮すると、ニーズとしては重要な項目と考えられる。

⁸ 順位を回答するという回答方法の複雑さからか、記入ミスが多かった。指定数以上の回答や指定外の記号使用等、無効回答が多くなったが、無効回答にも傾向があるので参考のためにその内訳を示す。「当たり前 27」「交流したい 24」「不便 16」「不便 38」

D. 地域の日本人との交流実態

地域の人との交流機会とその内容

項目	件数	機会の内容
よくある	16	パート、自治会活動参加、日本語学習、孫の幼稚園、保育園、学校、近隣の人、友達や子どもの同僚、病院、体育館、公民館、旅行
時々ある	33	町内会・自治会の集会や清掃のとき、日本人の来客、買い物、図書館の人、銀行・郵便局、近隣の人との挨拶、老年温泉(本人記述のまま)、親戚、役所
全くない	20	

外出頻度と場所

【頻度】週:0回(1件) 1-2回(17件) 3-5回(30件) 6-10回(10件)
15回(1件) 20回(1件)

【どんな時どこへ】「病院と買い物のみ」(20件) 「買い物のみ」(11件)
「買い物・病院を含む」(16件)

その他の外出場所:仕事・図書館・祭り・教会・郵便局・友人の家・役所・図書館・入管・散歩・海山・子どもの家・中国・日本語教室・保育園・体育館・老人温泉・親戚の家・美術館・公園

余暇の過ごし方

1位:中国のテレビ・ビデオ(34件)

2位:日本のテレビ、或いはテレビとのみ記述(15件)

その他の過ごし方として:日本語学習、趣味、家事、中国の新聞を読む、電話、散歩、手紙、孫と遊ぶ、友達に会う等

公共施設の利用(:よく利用、 利用したことはある、×:どこにあるかも知らない、 :選択肢にはないが記入有り)

場所			×	
公民館	5	8	12	1
図書館	8	14	9	1
(老人)福祉センター	3	6	16	
児童館	0	1	13	
保健所	1	8	12	
自治会の集会所	4	20	5	
その他	0	4	0	

で回答者の29%(20件)は「地域社会との交流が全くない」という結果だった。また、「よくある」「時々ある」の回答者が他の質問に対する回答率に比べ、孤児本人が選択する割合が高かった。これは、孤児本人の方が配偶者に比べて地域との窓口となる場合が多い可能性があるのではないかと。回答者の交流の内容を見ると、買い物や銀行・郵便局、役所等一般には「交流」とは捉えにくい、むしろ外出機会や日本人との接触場面と取った方がよい内容となっている。このことから、個人的な人間関係としての「交流機会」は全体としてかなり少ないと思われる。

また、の「外出頻度と場所」からも、外出機会が月に1回もないという者が1件、週1~2回という者が17件と回答者の約1/3は週0~2回の外出頻度であった。そして、外出先としては「買い物のみ」11件、「買い物と病院のみ」20件と、高齢帰国者の行動半径の狭さが窺える。

そして、費用もかからず、高齢者が利用しやすいと思われるの「公共施設の利用」も全体として低く、その存在すら知らない者の割合も高い。その中で、センターで実習として取り入れていることも影響しているのか「図書館」の利用率が「自治会の集会所」について高くなっている。

E. 交流ニーズ、学習ニーズ、またそれを阻害する要因

高齢者にとっての地域社会との交流機会の必要(複数回答)

項目	件数
あった方がいい	61
家族間の行き来があれば、それ以外にはあまり必要はない	7
家族と帰国者仲間とのつきあいがあれば、それ以外にあまり必要ではない	10
中国語のできる少数の日本人とのつきあいができればそれでいい	17
その他	5

「その他」の記述は、「日本語ができないので難しい」「休日は近所の人は車に乗ってどこかへ行ってしまっって人影もない」等

高齢帰国者にとって充実した生活に必要なものは(複数回答)

項目	件数
地域の中国人や帰国者同士が集まる場	21
自分の趣味や学習したいことが行える場	24
高齢者がゆっくりでも日本語を学習できる場	39
中国の様々な情報(新聞、テレビ、ビデオなど)	27
地域の日本人と知り合いになる場	26
家族以外で自分の気持ちを中国語で話せる相談相手	15
近所の日本人の友人	17
自分の技術や知識を生かせる場	16
新しい趣味(楽しみ)を見つけること	5
その他	1

地域にあったらいい「学習機会」(複数回答)

項目	件数
日本人との交流会(直接おしゃべりしたり、通訳を介した懇談会をしたりする)	39
中国文化や自分の特技を紹介する活動	16
日本人に日本の文化や生活を紹介してもらおう活動(直接や通訳を介して)	23
自分と同じ趣味を持つ日本人との活動	33
生活に必要な、または日本人との交流に使える簡単な日本語学習	46
その他	4

地域の日本人との交流が難しい理由(複数回答)

項目	件数
地域で自分の興味のある趣味の場や交流の場の情報が得られないから	24
地域の日本人との交流の場に誘ってくれる日本人がいないから	22
日本人との交流には通訳してくれる人が必要だと思うが、そのような人がいないから	32
地域の日本人と仲良くなるきっかけがわからないから	15
日本と中国では交流の方法が違うからつきあえない	16
その他	9

「その他」の記述は、「日本語の壁」「金銭の壁」「身近に通訳がいる」等

の結果から、地域社会との交流機会を「あった方がよい」とするのは61件あり、地域の日本人との交流ニーズは確かにあると思われる。しかし、一方で、日本語を介した交流の限界を感じている面もある。17件は中国語のできる日本人との交流、また家族のみ、或いは帰国者仲間や家族がいればよいとする者も17件あった。

の「充実した生活に必要なもの」と「地域にあったらいい学習機会」の総合的な傾向として、1位は高齢者を対象にした「日本語学習機会」、そして、「日本人との交流の場」、そして、「趣味活動の場」があがった。また、「充実した生活に必要なもの」に「中国の情報」が2位としてあがっている。また、の「家族以外で自分の気持ちを中国語で話せる相談相手」を選んだ者15件中12件は孤児本人であり、他の項目より孤児本人の選択率が高かった。これは、日本の生活の中で、孤児本人が心の中に抱える悩みの多さや複雑さを象徴しているようにも思える。

以上のように高齢帰国者に地域の人々との交流ニーズがあることは確認できたが、の結果からわかるように、交流ニーズに立ちただかる壁はなんといっても「日本語の壁」、通訳がいればなんとか交流できるけど自分の力だけでは無理と思う者が一番多かった。ついで「交流の場の情報が得られない」である。の公共施設利用の回答にもあったが公共施設自体の役割や機能を知らない者も多い。日本人なら地域の広報や口コミなどの情報ネットワークからキャッチできる情報も帰国者のもとには届かないことがわかる。そして、「誘ってくれる日本人がいらないから」が22件あった。情報が入らないことや日本語がわからないことから来る地域社会への距離感、敷居の高さを一人では埋められないが、周囲からの働きかけや仲介者がいればなんとか入って行けそうだと感じている者がかなりいることは、今後の支援のヒントとなるのではないか。

F. ライフステージと生き甲斐

帰国時のライフステージ

項目	件数
社会の中心となって仕事をする年代（現役期）	7
子育ても終わり、社会の中心となって仕事をする年代ではないが、短時間の労働は行って社会参加する気持ちはある（半引退期）	25
子育ても終わり、労働する時期も終わった、自分の余生を自分のために、家族のために使う年代（引退期）	27
その他	4

現在の年代意識の変化

変化の有無	変化有り	変化無し
件数	37	22

今の生き甲斐（複数回答）

項目	件数
仕事などで社会参加すること	12
子ども家族との行き来	25
子や孫の教育や就職	31
自分の趣味を楽しむこと	21
子ども家族が日本で（経済的に）安定、成功すること	34
その他	7

「その他」の記述は、「養母を長生きさせる」「自分の健康保持」「中国の娘に電話」「幼稚園に迎えに行き、孫に中国語を教える」等

日本に来て不自由になったこと（複数回答）

項目	件数
家族と一緒に（近くで）暮らすことができない	14
気の合う友人同士で行き来しておしゃべりすることができない	37
知り合いと趣味を楽しむことができない	37
趣味や興味を深めるための学習機会がない	24
老後生活の先行きが見えない	29
経済的に苦しい	28
好きなところに自由に遊びに行けない	31
行動半径が狭くなった	40
近所づきあいができない	40
社会的な地位がない	30
その他	6

「その他」の記述：「中国では日本人と思われたのに、日本で日本人と思ってくれる人はいない」「社会の助力を得られず、何かやろうとするたびに困難を伴う」等

の結果から、帰国時のライフステージの自己認識としては、ほとんどの者が半引退期から引退期と認識していた。これは、中国での生活を考えれば当然の結果であろう。1世代は中国ではとうに定年退職し、かなりの年数がたっている者がほとんどである。年齢的にも、社会的にも次世代へ引継ぎをする年代である。当然「今の生き甲斐」も、なんといっても子ども世代の存在である。子ども世代が、日本にうまく定着していくこ

とが最大の希望であることがわかる。しかし、一方、「自分の趣味を楽しむこと」(21件)も無視できないだろう。自分の老後の生活を充実させるためにも、自分自身の「楽しみ」のある潤いのある生活を希望していることがわかる。この「楽しみ」探しも来日後では不自由を感じる人が多いようだ。

の「日本へ来て不自由になったこと」として、1位は「行動半径が狭くなった」「近所づきあいができない」(いずれも40件)、ついで「気の合う友人同士で行き来しておしゃべりすることができない」「知り合いと趣味を楽しむことができない」(いずれも37件)であった。半数以上の人々が、中国の長年慣れ親しんできたコミュニティの中では自由であった行動、長年培ってきた人間関係で交わされるコミュニケーション活動、自分の好きなことを行う手だてが日本に来て失われたものであると回答している。これらは、いずれもごくごく日常的なことであり、人間生活の基盤に当たる部分である。それを奪われているということは老後の豊かな生活(QOL)が得られていないということである。また、これについで「社会的な地位がない」(30件)「老後の先行きが見えない」(29件)「経済的に苦しい」(28件)が中国にいた時より日本に来てマイナスに変化したこととしてあげられた。

そして、の「年代意識の変化」に関しては、具体的記述(32件)を見ると、年代意識の変化というより日本に来て変化したことと捉えての回答が多かったことがわかる。例えば、日本語の進歩や日本事情への理解が進んだなどの肯定的な変化から、日本語の困難さや生活の寂しさを訴える記述等。このような理由も含めて、「変化有り」の人数が増えたものと考えられる。しかし記述部分の中でも定着後に年代意識の変化があったと言っている者が14件あった。その内1件のみが「来日時は引退しかけていたが、今は社会活動に参加できる」とプラスの変化を述べていた。しかし、その他の13件は、来日後仕事をしようとしたが採せない、更に年齢が高まり、病気がちにもなり、いろいろな面で以前より衰退期(引退期)に入ったという内容であった。

G. 現在抱える問題や心情など

自由記述

最後に自由記述の欄についてであるが、71件の回答者の中で47件の自由記述があった。通常のアンケートであれば自由記述欄にこれだけの書き込みが見られることはないだろう。書き込みの他に自分の気持ちを切々と訴える手紙付きの者も数人あった。中国

出身者の場合、このようなアンケート調査をすると、教師への敬意と感謝のことばで締めくくられるものが多いが、今回の自由記述欄の内容はそのようなものとは趣が違った。その内容は定着地での自分や家族の置かれている窮状や心情を訴えるものや、支援制度の改善を訴えるものがほとんどであった。記述を分類してその内容を以下にまとめた。一人で複数の問題について記述をしている者もいるので件数の合計は記述者数を上回っている。また、自由記述欄には記述がなく、の記述欄のみに自由記述に当たるものを記述している者、また、自由記述の内容にはない訴えをの欄に並行して記入している者についても、広く帰国者の状況を捉える上で参考になると考え、取り上げることにした。その結果、合計で57件の記述から以下の分類を行った。

記述内容の分類	具体的な内容	件数
生活のこと	・現在の生活保護での生活が苦しい	15
	・年金の問題を解決して欲しい	5
	・生活に安全感がある	1
日本語のこと	・日本語が困難	19
	・日本語学習の場が欲しい	3
	・日本語が多少わかるようになった	4
中国の養父母のこと	・中国の養父母を見舞いたいので休暇を認めて欲しい	1
	・養父母を見舞いたいので生活保護をその間切らないで欲しい	5
仕事のこと	・仕事が見つからない	15
	・就職のための学習機会を与えて欲しい	1
	・肉体労働の仕事が辛い	1
人間関係のこと	・日本人ともっと交流したい	2
	・人間関係が中国にいた時より貧しくなった	1
	・孤独であり生活も単調	9
	・近所づきあいが難しい	1
2世世帯のこと	・子どもの就職が困難	5
	・子ども世帯の住居がない	3
	・子ども世帯との行き来がない(子ども達が忙しい)	1
	・子ども世帯の生活が困難	2
	・自費帰国者の日本語学習の場が欲しい	1
差別や無理解について	・外国人差別を感じる	2
	・日本人と認めて欲しい	2
	・中国帰国者に対する理解が得られない	3

健康のこと	・病気がちになり、健康状態の不安がある	5
その他	・センターの学習をより実生活に近づけて欲しい	1
	・生活保障してくれれば中国で暮らしたい	1
	・社会的地位がない	1
	・日本社会の風紀の乱れや犯罪が心配	1
	・日本への理解が少し深まった	4

上記の分類に沿って訴えの多い順に、帰国者自身の記述を織り交ぜながらその現状を紹介したいと思う。まずは、現在の生活保護受給状態また将来の年金問題など経済生活面での不満、不安を訴える声が20件と一番多かった。実際の記述として「生活はかつかつで家を離れる（里帰りなど）と生活費をもらえなくなる」「中国で40年間つらい仕事をしてきた。もし、この40年日本人と同じように日本で育ち老いてきたら、有るべきものはあり、ないものは自分で働いて努力して手に入れることもできた。しかし、今は何もなし。生活保護を受けて暮らすのみで、生活するのが精一杯、少しの贅沢も望むことができない」というように、「生活保護」という保障（補償）のあり方に疑問を呈する声が多かった。そして、「私は中国人だから日本社会での活動は大変困難で、今の状態を維持するのみである。しかし、将来晩年の生活を維持するのは経済的に難しい」というように老後の生活保障という点での不安の声も多かった。また、にあるように中国の養父母のことが生活保護との関係で述べられるケースも多かった（6件）「養母は80歳あまりだが、誰も面倒を見る人がいない。（中国に）帰ってこの老人を訪ねたいが、この間のわずかな生活費も差し引かれる。大変困難だ。...その間の生活費を差し引かないでくれたら養父母に何か買ってあげたりできるだろう。本当にこの希望が現実になることが夢です。老人はもう何年も生きられないのだから」というように、中国の養父母を見舞いたい生活保護制度では日本を離れることが、生活費のカットにつながるという不満を異口同音に訴えていた。

ついで「日本語の困難」訴える者が19件あった。記述の中には「ことばがわからないので毎日の生活が煩わしく悶々としている。私たちは大きな籠の中に入られているように日本人と接触することもできない」、また「50余年中国語を話していたのに日本語が突然頭に入るものだろうか。煩わしい事情が多く不安定な心理の中では、ある言語が他の言語を押しつけて入って来ることは易しくない」、そして、「一人の生活は寂しく学習上も進歩がなく自発的な学習ができない」など、ことばの壁から来る閉塞感と不安定な心理状況から来る学習困難が悪循環を生み、「日本語の壁」がかなり精神的なスト

レスとなっている様子が窺える。ただ記述の中には、「今、ある程度進歩し、日常用語もできるようになり、用事も足せるし、病院でも少し聞き取れるようになり、楽になった」というような者も4件あり、習得の可能性を示唆するものとして救いである。この4人はセンター退所時年齢も56,7歳と回答者の平均年齢より若干若い人々であった。

次に多かったのは「仕事が見つからない」という声の15件である。しかし、これは回答者の平均年齢や日本語力から考えれば、この不況下で就職できることはごくごくまれなことではないだろうか。その不可能であって当然とされることについて、これだけ訴えが寄せられている。ここには、未だに周囲から「経済的自立」を求められ、自らも「日本人」として自立しなければと努力する高齢帰国者像が見える。

その次は「人間関係」に関する悩み（13件）である。訴えのほとんどは、「孤独感や生活の単調さ」であったが、その要因としては人間関係以外にも、日本語の問題や経済的な問題、社会的な挫折などの背景が考えられる。しかし、孤独感や喪失感を感じる直接的な理由は、やはり現在の希薄な「人間関係」であると言えるのではないかと。例えば「今、自分の人生は社会の片隅にいるようだ。誰も私を訪ねてこないし、誰も私の気持ちや計画を尋ねようともしない」。この人物は中国ではステータスの高い職業に就いていて、日本に来てその専門性を活かし社会参加をしようとしていたが、挫折してしまったという経緯がある。そして、その挫折感を癒す人間関係を得られない。また、「日本で生活するからには、日本社会に適応し交流しなければならぬ、お互いに理解し合ってこそとけ込むことができる。閉ざされた生活は苦痛であり、生活できない」。私は以前は明るく活発で歌や友達との交流も好み熱心に働いていた。今はとても孤独で人生にも希望がなく理想もない」というように、日本に来て新しい人間関係を作りたいけれども作れないことから来る絶望感を訴える者もいる。また、高齢になればどんな人間にも訪れる配偶者との死別がある。「60歳を過ぎて連れ合いがいなくて、孤独で寂しい。友達を見つけるのは難しく、連れ合いを見つけるのは更に難しい」というように、配偶者との死別は今後時間がたてば更に増えていく問題である。現在から将来に向けての高齢帰国者の「孤独感」へのケアは大きな課題と考えられる。

ついで「2世世帯のこと」（12件）である。2世世帯の仕事、住居、日本語学習、生活の困難や親子間の行き来の難しさなどがあがっていた。この「2世世帯」は、多くは呼び寄せ家族の問題だと予想されるが、子どもを呼び寄せたことで、高齢帰国者自身が一層ストレスを背負い込む結果となる面もあるようだ。

そして、「差別や帰国者への無理解を感じる」(7件)が続く。孤児本人の記述であるが、「自分は日本人である。日本社会や日本人は自分を中国人としてしか見ない。私たちはこのように老人になり強く思うことは、日本社会や日本人に私たちを本当の日本人と認めて接して欲しいということだ」「私の住んでいる地域には中国帰国者はいない。この地域の人達は、中国帰国者が何であるか全く知らない」と言う。本来あるべき場所に戻ったのだという意識に対し、「中国残留孤児」という存在さえ知らない、そして自分達を「中国人」としか見ない日本人がいる。中国で抱いていた日本、日本人への思いと現実のギャップによりストレスが増していると考えられる。また、仕事探しや日常生活の中で日本人の外国人(特に中国人などアジア系の人々)への蔑視を感じる人が多いという記述もあった。

の「健康のこと」(5件)は、高齢者であれば皆遭遇する体力の衰えや病気への悩みであるが、訴え方の特徴として、病気そのものについての悩みというより、その身体的衰えと日本語、日本語学習の困難、経済的自立の困難等と同時に語られることが多かった。こうした訴えには、実際の身体的能力の喪失以上の喪失感が含まれていると感じる。

最後の「その他」には、「日本への理解が深まった」というものが4件あった。内訳は肯定的なもの(前向きな表現)3件、否定的なもの1件であった。肯定的なものとしては「日本社会に入り生活し始めた方がより一歩日本への理解を深めることができた」「日本の政治経済歴史各方面についての理解が大体できた」などである。否定的なものとしては「日本人は中国人と考えが全く異なることがわかった」というものである。これについては、この記述だけでは肯定的とも否定的ともとれるものであるが、アンケート全体の記述部分からこう判断したものである。彼女は他の部分では、日本人や日本社会が自分達へ向ける差別的な視線や理解のなさについての不満を述べ、日本にいる2世世帯との行き来も困難であり「政府に希望することは、毎月的生活費を私たちにくれ、中国に帰り生活できれば満足である」と書いている。

・高齢帰国者に必要な「支援」とは

(1) 高齢者にあった「日本語学習の場」の必要

調査結果からも高齢帰国者の日本語学習ニーズは高かった。しかし、一方で「覚えられない」「記憶力がだめだ」「忘れる」という訴えも大変多く、中には「時間の無駄」と

いう者さえいた。「日本語学習の場」が、この挫折感を再生産する場にしかならないのであれば、その存在の意味はないだろう。では、どのような点に留意すればよいのだろうか。

まず、孤児本人には、日本語が上達しない自分を責め、時として過剰に「日本語」へ同化しようとする傾向が見られる。「自分は日本人なのに母国の言葉ができないのは残念である」「日本語ができないと社会に貢献できないし迷惑をかける」という気持ちが却ってストレスを高め、逆に学習を疎外する心理的要因にもなりかねない。このような人には選択肢が一つではないこと、例えば「日本語を話さないこと」を選ぶ自由もあるという発想の転換も必要ではないか。高齢帰国者の日本語学習は心理的負担を伴いがちである。まず、この負担をいかに軽くしていくかが課題であると思う。

また、「学習目的」に多かった「生活するのに不便だから」についても、もちろん日本語を習得して解決できる部分もあるだろうが、いくら学習しても簡単に解決できない問題も多いということを認識しておく必要がある。例えば、「病院での会話がわからない」という訴えをよく聞かすが、日本語が母語の者でさえ、医師の話す専門用語や機械的な病院システムの流れの中で、理解不能のことばや聞き取れないことばも少なくない。このような場合、日本語学習のみにとらわれない問題解決の視点で考える必要がある。同伴してくれる通訳者を探すのも一つであろうし、中国語の話せる医師を見つけるのも一つである。このように、「日本語学習」が常に、彼らのニーズに応える手段ではない場合もあることを忘れてはならないだろう。

しかし、このような前提を踏まえた上で、やはり「日本語学習の場」は必要であると考えられる。但し、その場は語学力としての日本語能力を効率よく高めることを目的とすることによって高齢学習者に挫折感を感じさせる場ではなく、「学び続けられる可能性を感じられるような場」でなければならないということだ。では、その可能性を見いだすために必要なものとは何だろうか。「学ぶという行為は人との交流の果てに、人との関係に豊かなものを期待しようとすることでもある。その意味では、高齢者の学習にとっては、学習と関係は、もっとも基本的なことであり、大事にされなければならない」(1995百瀬)というように、その日本語学習の場には「関係性」=コミュニケーションがなければならない。「覚える」ことに主眼を置いたり、一方的な情報の提供(講義)に終始したりしない工夫が必要だろう。そのような高齢者向けの「日本語学習の場」を模索していくことが今後の課題である。

(2) 「健康」を作る「人間関係(交流)」の必要

高齢者のメンタルヘルス(精神健康・心の健康)に関する研究分野では、高齢者が心理社会的な虐待により陥りやすい心理的反応として「孤独・無力感・喪失感・絶望感・自尊心の低下・抑鬱感情」(1994 宗像、川野)があるとされている。本調査の中で高齢帰国者達の訴えとして「孤独」「閉塞感」「寂寞」「単調な生活」「片隅」「社会淘汰」などの表現が多く見られた。これらはメンタルヘルスが傷つけられたときに起こる心理社会的反応とほとんど重なってしまう。このことは、高齢帰国者のメンタルヘルスが失われつつあるかなり深刻な状況ではないかと予想される。「高齢者の健康観は、身体の状態、心理状態、対人関係、社会との関わり方、経済状態など種々の因子の影響の表れの総体としての意味である」(1984 安藤・村田)といわれるが、高齢帰国者の「健康」を考える時このメンタルな部分の「健康」に注目して行かなければならない。

残留邦人達が、高齢になっても帰国したいという動機の一因として、人生の中の未解決な部分⁹である自分の中の「日本」「日本人」という部分を、人生終盤のライフステージでなんとか解決したいと思うのではないか。それだけに、帰国後の日本語習得の難しさや、日本社会の無関心はセルフ・エスティーム(自尊感情)の喪失¹⁰を招き、未解決な問題がますます複雑化して自分自身を失っていくプロセスにつながる可能性があると思う。このような危機的状態を救えるのは、やはり「人間関係(交流)」である。悩みを打ち明けられる人間の存在、関係を求めてくる人間の存在があって初めて、自分自身を実感できる。そして、自分が「ここ」にいる意味を見だしていくことができる。このような肯定的な意味での「依存関係」を持てる「人間関係」の構築が「ここ」に存在できるかどうかの鍵である。

とはいつても、「(老人)が現実的な喪失を新しい満足で置き換えることは、大変な努力を要するものである。また、二重の喪失を予感して新しい関わりにためらいを持つ。新しい関係を持つとするのは、この年齢では大変な努力がいるのです」(1992 西村)というように、日本で生活し続けてきた日本人でさえ、このように二重の喪失を避けた

⁹ 老齡期のメンタルヘルスの情緒面の特徴として、「今まで適応できていたことが壊れ、以前の未解決であった問題が表面化する」ことが挙げられている(1992 西村)

¹⁰ 遠藤(1992)はセルフ・エスティームの心理に関する研究の中でサリヴァンを引いて、セルフ・エスティームの喪失は「重要な他者」による自我の価値を落とされることであるとし、他の人びとがどのように

がる中、高齢帰国者は、馬場(2000)でも触れたが、加齢による喪失に加えて、移住したことによる二重三重の喪失体験をしている。従ってその長期のストレス¹¹によりセルフ・エスティームがかなり低くなっている状態の中で、「新しい関係」を作っていくとすることは、想像以上の意志と努力が必要と思われる、実際には自分一人で関係づくりを行っていくのはかなり困難と言わざるを得ない。調査結果からも交流に対する希望はあるが、実際には「通訳してくれるひとがないから」「誘ってくれる日本人がないから」交流が難しいとあった。この問題を解決していくためには、高齢帰国者を巡る地域支援ネットワーク¹²が必要であろう¹³。

(3) 老後の生活のイメージを作る「環境」の必要

調査結果では、「老後の先行きが見えない」「経済的に苦しい」を選択する者が多かった。自由記述の中にも「目前の問題は生活に変化のないこと、心配なことは老後の生活問題である」「一番心配なのは老後の生活です。中国で苦難に満ちた生活を送り、帰国後は税金を納めていないので年金をあてにできない」「年齢が高くなっても老人としての待遇を受けることができないので生活はいよいよ困難になる」「歴史上の侵略戦争により我々残留孤児の悲惨な境遇と不幸な人生が作られたのですから政府が責任を負わねばならない。帰国者の子女に責任を転嫁するのは道理に合わない」などに代表されるように、老後の生活不安を訴え、保障(補償)を求める声が多かった。2,3世が1世代を支えることを期待するような現在の制度の中で、1世代は子世代の生活に自分達の存在が負担となり影響を与えることが精神的に圧力となるという者もいた。

老後の生活設計を行うためにも、まずは経済的基盤をどのように確保するかが明らか

自分を気遣っているかということが自分自身の評価の成分となると述べている。

¹¹ セルフ・エスティームを下げる要因: 傷害・欠陥・外傷性の経験・長期のストレス・強い人間関係の崩壊(1992 遠藤他)

¹² 地域支援ネットワークの3層構造: 第一層「オフィシャルネットワーク」(関係構築、関係施設、関係組織が互いに横につながる)、第二層「プライベートネットワーク」(オフィシャルネットワークに所属する人々がお互いを知り合い、ケースを介在させながらより一層関係を深めることによって成立するもの)、第三層「ベシクネットワーク」(地域社会の住民が互いに手を結び研作のもの。但し、ベシクネットワークは自然発生的にはできない、核になる人や機関、組織があって周囲にまとまりが生じ地域に広がる)(1994 宗像、川野)

¹³ この地域ネットワークの部分的な試みについては紀要8号の「サロンコースの試み」を参照されたい。

にされる必要があるだろう。しかし、現在の生活保護に頼る生活や、年金に頼れない状況、そして1世世帯を支える役割を担わされている2,3世世帯自体の経済的安定も難しい中で、高齡帰国者の老後は不安定であり、老後は日本にはいられないのではないかという思いも生まれている。高齡帰国者の歴史的な背景と切り離せない特殊な人生のプロセスを考えると、一般日本人向けの生活保障制度ではなく、彼らに見合った経済的支援のできる制度が必要であろう。

また、高齡帰国者のこれからを考えると、現在はまだ身辺自立が保たれている者も多いが、将来的には介護の問題などが出て来る。その時、ことばや文化習慣の違う帰国者は現在の介護システムでは利用しにくい部分も出てくると思われる。高齡帰国者も安心して介護が受けられるシステム¹⁴を考えていく必要がある。そして、身寄りのなくなった帰国者や事情があって子世帯とは一緒に暮らせない者のためにも、帰国者のための老人施設¹⁵が必要になるのではないかと思う。このような、人生の終わりに至るまでの拠りどころが見えない環境では、老後の設計は難しいだろう。

そして、1世世代の老後のイメージを作るためには、2,3世の生活の安定や将来設計が円滑に行えるような支援も必要だろう。なぜなら子ども達との関係は老後の生活の要素を作る大きな条件となるからである。年老いていく時、2,3世たちがどのような状態にあるかは1世世代の老後の生活を大きく左右する。

最後に、「情報」から疎外されない「環境」を作ることが必要と考える。高齡帰国者は閉じこもりがちになり地域の情報ネットワークから外れ、国民として住民として知っておかねばならない情報が届きにくい立場にある。このような状況下では、義務を遂行するにも、権利を行使するにも不自由であり、社会から知らぬ間に疎外された存在となり

¹⁴福岡県にはボランティアによって運営されている「中国帰国者介護支援センター」があり、介護についての相談やヘルパー派遣、2,3世のヘルパー養成等を行っている。また帰国者の介護を専門に行うヘルパーステーションもできた。また、東京都では練馬区の帰国者支援グループ「同歩会」が都の委託を受け「介護ヘルパー講習会」等を開いている。

¹⁵在日韓国籍韓人1世たちにとっても介護問題など老後保障の問題が現在の課題となっている。長年日本に暮らして日本語を不自由なく使っていた1世も加齢にともない母語に回帰するという現象が起こるといふ。そのような状況もあり、1世達のための介護支援やデイケアセンター、老人ホーム設立等に支援者達は取り組んでいる。

かねない。従って、中国語による、また帰国者の状況が分かっている人達による情報ネットワークが必要であろう。

・おわりに

最後に、なぜ「高齡帰国者」について考えて行く必要があるかを述べておきたい。もちろん、個人的に帰国者との日々の関わりの中で人間関係が培われ、身近な存在となったということもある。また、日本社会の異文化異言語への許容度の低さは、日本に暮らす「日本人」自身の多様性をも認めないことにもつながり、ボーダレス化が進む世界の中で、「日本」という許容度の低い国に大きな不安があるからだ。

しかし、このこと以上に、どうしても1世世代の問題について拘っていかねばならないと考えるのは、彼らの背景には「第二次世界大戦（以下、戦争）」という私たちが生まれ育った「日本」の歴史があるからだ。その「戦争」について戦後世代の私たちは「忘却」しかけているというよりも、その実態さえ正確に知ることができていない。自分の親世代の時代に起こったことであるにも関わらずだ。そして、戦後55年以上たちながらも、未だに尾を引き解決しきれない様々な戦後の問題の一つである「残留邦人（残留孤児を含む）」の問題は「現実の問題」として私たちの日常生活の中にある。私たちは、未だにこの「戦争」が引き起こした悲劇に対処する「仕事」をしているのだ。そして、彼らの問題が今の日本でどう解決されるべきかを考え、そのためにはどのような支援が必要かを考えていこうとしている。この自分自身や多くの日本人が感じている時間のギャップを埋めるためには、「戦争」を引きずりながら生き続けてきた人達の声聞き、彼らについて、そしてその背景についてもっと深く知らねばならない。「残留邦人」が中国等に残されるに至った経緯、長期間帰国できなかった、或いは長期化している帰国作業の理由、彼らが帰国まで中国等でどう過ごしてきたかということ、そして、どのような気持ちで帰国を望み、待ったのか。そして、帰国がかなった後どのような気持ちで日々を送っているのか。私たちはもう一度、これらの事柄を掘り起こし、記録していく必要があるだろう。

同時に、自分はどのような姿勢でこの問題に臨むのかという問いに対する答えを見つけていく必要がある。私は、それが「戦後責任」の中に自分を置くことなのではないかという気がする。もちろん、この「責任」とは私が「戦争」を起こした責任者であると言っているのではない。高橋（1999）は戦後責任をめぐる議論の中で「責任

(responsibility)を「応答可能性」ということばで捉え直している。これは罪責としての「責任」とは異なり、「他者からの呼びかけに応答する可能性を持った存在」としての人間という意味が込められている。人は呼びかけに応える「責任」を持つ。この意味で「日本の政治的主権者」としての「日本国民=私」は、時代がどのように移り変わろうとも、帰国者達と共に未だ「戦後」であり続ける現在、国家の行った「戦争」で被害を受けた彼らが発することばや訴えに込めていく「責任」があると思うのである。

【参考文献】

- ・馬場尚子(2000)「高齢化する帰国者の『学習機会』を考える サロンコースの試みを通して」中国帰国者定着促進センター紀要第8号
- ・厚生省社会・援護局(2000)「中国帰国者生活実態調査結果」
- ・中国帰国者支援に関する検討会(2000)「中国帰国者支援に関する検討会報告書」
- ・黒沢惟昭/森山沾一編(1995)「生涯学習時代の人権」百瀬勝『高齢者のための教室』明石書店
- ・安藤延男/村田富久編(1984)「これからのメンタルヘルス」ナカニシヤ出版
- ・西村良二(1992)「医療・看護メンタルヘルスの看護学」ナカニシヤ出版
- ・遠藤辰雄/井上祥治/蘭千壽(1992)「セルフ・エスティームの心理学」ナカニシヤ出版
- ・宗像恒次/川野雅資編著(1994)「高齢社会のメンタルヘルス」金剛出版
- ・高橋哲哉(1999)「戦後責任論」講談社
- ・蘭信三他(H10)「『中国帰国者』をめぐる地域社会の受容と排除に関する比較社会学的研究」小田美智子『第9章：日本人孤児養父母の現状』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金研究成果報告書
- ・福岡中国残留婦人問題を考える会(1997)「帰国した中国残留婦人等の実態調査」1996年度市民グループ調査研究支援事業

【資料】調査票(送付アンケートは中国語)

1. 以下の欄にご記入ください。

氏名	日本名:	中国名:	センター入所期:	期
住所	電話			

同居家族	例: 6人(妻、次女夫婦、孫2人)
同居以外の家族	例: 長男家族(5人)

2. 所沢センターを出てから、日本語を学習しましたか。学習した場所と年月、内容などを下の表に記入してください。

場所	期間	内容(教材など)
例: 自立センター	96年6月～97年1月 毎日午前	新日本語の基礎
例: 公民館等の地域の日本語教室	97年4月～97年9月 週1回土曜日	作成プリント(会話中心)
例: 家で自立指導員等から	96年6月～97年1月 週2回	生活日本語

3. センターを出てからの日本語学習の内容やペースは、どの程度自分にあったと思いますか(以下から選んで をつけてください。複数回答可)

- ・どれも自分にあった学習だった(どんな点が良かったですか:)
- ・自分に合ったものもあったし、合わないものもあった(合ったものがある人は、どんな点が良かったですか:)
- ・どれも自分にはペースが速すぎた
- ・どれも自分には内容が難しすぎた
- ・その他()

4. 現在のあなたの日本語学習の状況、希望は以下のどれに近いですか。あてはまるものに一つ をつけてください

- ・今、教室で学習中である
- ・今、自分で学習している(どんな方法で)
- ・今は、適当な学習の場はないが、自分のペースや、レベルにあった高齢者向けの教室があれば学習したい
- ・今更もう日本語の学習はしたくない(今のままでよい)
- ・その他()

5. 「4」で学習したい、学習していると答えた方、学習する目的は何のためですか。1番目の目的に をつけてください。その他にもあれば2番目の目的には、3番目の目的には を書いてください。

- ・()日本に来たのだから当たり前
- ・()日本人と交流したいから
- ・()日本で生活するのに不便だから
- ・()日本語を学ぶのが楽しいから
- ・()日本語ができないと子や孫とコミュニケーションがとれないから
- ・()その他()

6. 「4」で「もう日本語は学習したくない」と答えた方、学習したくない理由は何ですか(複数回答可)

- ・勉強しても覚えられないから
- ・日本人とつきあう機会もないから
- ・家族や帰国者仲間とつきあえれば満足だから
- ・将来は中国に帰りたいから
- ・その他()

7. 地域の人々との交流の機会がありますか

- ・よくある(どんな機会ですか:)
- ・時々ある(どんな機会ですか:)
- ・全くない

8. 孤児世代等、帰国時の年齢が比較的高い年代の帰国者にとって、地域社会（日本人）との交流の機会が必要だと思いますか。以下、あてはまるものに をつけてください。（複数選択可）
- ・是非あった方がいい
 - ・できればあった方がいい
 - ・家族間の行き来があれば、それ以外にはあまり必要はない
 - ・家族と帰国者仲間とのつきあいがあれば、それ以外にはあまり必要ではない
 - ・中国語のできる少数の日本人とのつきあいができればそれでいい
 - ・その他（ ）
9. 地域の日本人との交流が難しいと思う方、どのような点が難しくしていると思いますか。以下あてはまるものに をつけてください。（複数選択可）
- ・地域で自分の興味のある趣味の場や交流の場の情報が得られないから
 - ・地域の日本人との交流の場に誘ってくれる日本人がいないから
 - ・日本人との交流には通訳してくれる人が必要だと思うが、そのような人がいないから
 - ・地域の日本人と仲良くなるきっかけがわからないから
 - ・日本と中国では交流の方法が違うからつきあえない
 - ・その他（ ）
10. 高齢の帰国者にとって日本での生活で、人間関係を作るためや、生活を充実させるために（経済的状況以外に）必要なものは何だと思いますか。以下、あてはまるものに をつけてください。（複数選択可）
- ・地域の中国人や帰国者同士が集まる場
 - ・自分の趣味や学習したいことが行える場
 - ・高齢者がゆっくりでも日本語を学習できる場
 - ・中国の様々な情報（新聞、テレビ、ビデオなど）
 - ・地域の日本人と知り合いになる場
 - ・家族以外で自分の気持ちを中国語で話せる相談相手
 - ・近所の日本人の友人
 - ・自分の技術や知識を生かせる場
 - ・新しい趣味（楽しみ）を見つけること
 - ・その他
11. あなたは、どの程度、どんな時にどこへ外出しますか
- ・頻度：・週に（ ）回ぐらい ・月に（ ）回ぐらい
 - ・どんな時どこへ：（例：仕事、病院、買い物など）
12. あなたは、以下の地域の公共施設を利用したことがありますか。あるものに をつけてください。（複数回答可）よく使うものには をつけてください。どこにあるか知らないものには×をつけてください。
- ・（ ）公民館 ・（ ）図書館 ・（ ）(老人)福祉センター ・（ ）児童館・（ ）保健所
 - ・（ ）自治会の集会所 ・（ ）その他（ ）
13. あなたは、家で暇な時は、どんなことをして過ごすことが多いですか。
- 例：中国のビデオを見る、裁縫、編み物、園芸など
- （ ）
14. あなたにとって今の生き甲斐とは何ですか。以下あてはまるものに をつけてください。（複数選択可）
- ・仕事などで社会参加すること
 - ・子ども家族との行き来
 - ・子や孫の教育や就職
 - ・自分の趣味を楽しむこと
 - ・子ども家族が日本で（経済的に）安定、成功すること
 - ・その他（ ）

15. 高齢者向けの「学習機会」として、どんな場が地域にあつたらいいと思いますか。以下、あてはまるものに をつけてください。（複数選択可）
- ・日本人との交流会（直接おしゃべりしたり、通訳を介した懇談会をしたりする）
 - ・中国文化や自分の特技を紹介する活動
 - ・日本人に日本の文化や生活を紹介してもらおう活動（直接や通訳を介して）
 - ・自分と同じ趣味を持つ日本人との活動
 - ・生活に必要な、または日本人との交流に使える簡単な日本語学習
 - ・その他（ ）
16. あなたは、中国での生活と比べて、日本に来たことによって不自由になったと思うこととはどんなことですか。以下からあてはまるものに をつけてください。（複数回答可）
- ・家族が一緒（近くで）に暮らすことができない
 - ・気の合う友人同士で行き来しておしゃべりすることができない
 - ・知り合いと趣味を楽しむことができない
 - ・趣味や興味を深めるための学習機会がない
 - ・老後生活の先行きが見えない
 - ・経済的に苦しい
 - ・好きなところに自由に遊びに行けない
 - ・行動半径が狭くなった
 - ・近所づきあいができない
 - ・社会的な地位がない
 - ・その他（ ）
17. あなたは日本に帰国した時（所沢センター入所時）自分自身はどんな年代にいたかと思っていましたか？以下から一つ選んで をつけてください。
- ・社会の中心となって仕事をする年代（現役期）
 - ・子育ても終わり、社会の中心となって仕事をする年代ではないが、短時間の労働も行って社会参加する気持ちはある（半引退期）
 - ・子育ても終わり、労働する時期も終わった、自分の余生を自分のために、家族のために使う年代（引退期）
 - ・その他（ ）
18. 17番でお聞きした、センター入所時の自分自身の年代意識と現在では、何か変化がありましたか。
- ・変化がある
 - （ある方はどのような変化がありましたか？具体的に書いてください： ）
 - ・変化はない
19. 日本での生活で、ここを改善したい、してもらいたいなあとと思うことや、日常生活の中でここをもう少し充実させたいと思うことはありますか。あれば自由にお書きください。また、その他、高齢の帰国者に必要と思うことがあれば自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました！(^^)!